

豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む(3)

著者	阿部 聖
雑誌名	地域政策学ジャーナル
巻	4
号	1
ページ	99-115
発行年	2014-07-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1082/00003510/

豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む(3)

阿 部 聖

地域政策学ジャーナル 第4巻第1号(通巻第6号) 抜刷

2014年7月31日発行

愛知大学地域政策学部 地域政策学センター

豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む (3)

阿部 聖

Introduction of the Diary of Air-raid in Toyohashi Area during the Pacific War Written by Uzuhiko Toyota, Part 3

Sei Abe

要約：豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』（第一冊～第六冊）のうち、今回は第一冊の1945年1月10日から第二冊の1945年1月20日までの分を紹介する。1945年に入って3日（名古屋）と9日（東京）の大規模空襲の後で13日には三河大地震が発生した。大規模空襲は14日（名古屋）、19日（明石）と続く。加えて気象観測爆撃、写真偵察等の少数機は連日のように本土に来襲した。少数機の来襲については、ピース大阪が所蔵している米軍資料の作戦概要（Operational Summary）を新たに利用しつつ、日誌を読み進めていく。

キーワード：豊橋、名古屋、浜松、三河大地震、気象観測爆撃、写真偵察

（本誌第2巻第1号より続く）

1月10日（水）

(47) 丁度夜半十二時用便に起きて再び床に入ると警戒警報が鳴り出した。すぐ起きて戸外に出て見る。風もない静かな夜だ。この夜半に敵めまたうせたかと思ふと腹立たしい。大方昼間爆撃した後を偵察ながらやつて来たのだろう。暫くすると西の方から微かに例のウンウンの爆音が聞えて来た。あちこちで退避の鐘が鳴る。婆さんと呼んで退避させたが間もなく闇に消えて仕舞った。情報によると敵は一、二機らしく。渥美半島から侵入し、先づ岡崎に向ひ、それから方向をかへ、浜名湖の北方を通つて東部管内に侵入したやうだ。もう大丈夫と思ふとたん警戒警報が解除された。時に〇時五十分。

(48) 憎らしい敵めがまたうせた。時は午前四時、

警戒警報が、明けるにはまだ間のある暁の空に鳴り渡る。出て見ると折柄、山の端を出た月が微かに下界を照らして居る。

忽ち東から例のウンウンの爆音が聞えて来た。そこで退避の鐘が鳴る。爆音を追つて東の空を見詰めてみると間もなく彼方に消えて仕舞った。情報によると敵は浜名湖附近から侵入し西進すると見せかけ反転して北方を東進、富士山の南方を東部管内に入つたらしい。丁度前と同じ手口だ。もう危険もあるまいとたき火に暖をとりながら茶をすすつてみると警報解除。時に四時四十分、ままよとそのまま起きて仕舞った。

〔解説〕米軍資料、作戦概要（Operational Summary）¹

によれば、1月9日、第73航空団のB-29、3機が気象観測と東京ドック地域の攻撃を目的

1 同資料は、大阪国際平和センター（ピース大阪）が所蔵するアラバマ州のマックスウェル空軍基地内にある合衆国空軍歴史研究センター所蔵資料の一部である。参謀団作戦主任から司令部へ提出されたもので、日々の作戦の概要を1日ごと、作戦ごとにまとめている。爆撃作戦の他、気象観測爆撃、写真偵察などの作戦の概要が記されている（前掲「太平洋戦争期のアメリカ空軍資料」参照）。時期的には1945年1月6日以降のようすがわかる。Operational Summaryは、1月6日にNo.1から始まっている。ただし、同日の気象観測爆撃任務はすでに88回を数えている。なお、同資料の引用に関しては、煩雑さを避けるため、以下では、作戦概要とのみ記す。

に出撃した²。そのうちの1機 (WSM100 = Weather Strike Mission No. 100の略、気象観測爆撃任務第100号の意) は、9日1350K時 (日本時間12時50分) に出撃したが機械の故障のため早期帰投した。残り2機のうち1機 (WSM101) は、1848K時 (同17時48分) に出撃、10日0150K時 (同9日23時50分) にM18 収束焼夷弾12発を東京に、4分後に3発を銚子に投下した。もう1機 (WSM102) は、10日1226K時 (同11時26分) に出撃し、0552K時 (同04時52分) にM18収束焼夷弾18発を東京に投下した。WSM101は、追加情報として「伊良湖岬から東京まで6枚のレーダースコープ写真を撮影した」と記した。米軍資料及び日誌の記述から推測して、2機はそれぞれ渥美半島または浜名湖から上陸し、富士山周辺をIPとして東京へ向かったものと推測できる。

日誌が伝えているのはWSM101と102の2機の来襲の様子と思われる。この10日の来襲について豊西村 (1944-45) は、1回目は00時05分警戒警報、00時53分同解除で「名古屋方面ヨリ浜松東方ヲ海上へ脱去セリ」「西方ニ爆発音聞ユ湖西地波田村トノコトナリ」と記しており、2回目は04時15分警戒警報、04時58分同解除で「伊豆方面ヨリ浜松、名古屋方面へ進行ス」としている。同記録によれば、日誌ではふれていないが、同日20時14分から20時48分にも警戒警報が発令され、B-29、1機が「湖岬ヨリ奈良、知多、浜松東方ヲ海上へ脱去」した。

原田良次 (1973) は、00時05分、B-29、1機が下田より侵入、岡崎、甲府をへて東京へ、焼夷弾投下、04時25分、B-29、1機、浜松、甲府より東京へ、20時00分、B-29、1機、伊豆半島より、甲府、立川をへて東京へ、と記している (121頁)。20時00分の来襲については伊豆半島からの侵入であったため、豊橋では警戒警報が発令されなかった可能性がある。

◎炸裂の現状を見る

午前六時家を出て昨日爆弾の炸裂した^{あくみ}飽海田圃の現場を見にゆく。夜はまだ明けきらず、あたりは薄暗い。現場に近く漸く開け放たれた夜のとばり。見ると民家のそここ屋根の痛み硝子の砕けたのが目につく。水道橋を渡るとすぐその下^{しもて}モ手の堤防をくりぬいて大穴が明いて居る。それから一町余り北の田の中に五つ。またそれ位北にはなれた豊川の堤防近くの一つ。その東の台地の上に一つ。(外に今一つ。) 即ち合せて九つの大穴が丸で噴火口のやうに口を明けて居る。摺鉢形で直径凡そ五六間深さは三間位もあらうか底にはもう水が溜まつて居る。田の中のは単に大穴を開け周囲に土が盛り上がつて居るに過ぎないが、水道橋直下のは護岸の石張りが爆風にはねとばされ、川を超へ四五間も高い飽海の台地へ飛散し、その数は百個にも達しやう。最も遠いのは現場から五六十間も飛んで居る。それが何れも三四十貫ある栗石だ。今水のない新川の中にも十数個横たはつて居る。民家の屋根を痛め、戸障子を砕いたのはその所為でその一発のための被害が断然多い。然し田の中のも五発も固まつて落ちたので爆風はかなり強く、あの新川沿ひの道の片側は大地震のあとのやうな崩れが一町余りも続いて居る。自分の見たのは以上六ヶ所だが全部が市街地を距れた田の中だったといふことは、全く神明の御加護でもし敵が一秒早く落したら飽海は全滅。二秒早かったら旭町から新町へかけて全滅しただらう。神明の御加護はそれ許りでなく程近い無蓋の退避壕に子供が三人ゐた。その三尺と距れない地点へ三四十貫の大石がふつとんで来たのに中の子供はかすり傷一つうけなんだ。民家が二三軒フツ飛んだなどは全くのデマで怪我人といへば誰やらが顔に一寸したカスリ痕を出かしたといふ位。全く絶無だったのも神明の御加護といはずして何といはふ。これが市の中心でも落ちたものなら大変なことが持ち上つたことだらうに。こんな程度ですんだことはほんとに有難いことだ。

2 気象観測爆撃任務のB-29は、ほぼ毎日、一日 (1200Kから翌日の1200Kまでの1日) に3機、一定の時間を置きながら出撃した。そのため遅い時間に出撃した場合は、日本に到達する時間が翌日になる。同任務について本稿では、原則として、出撃日時ではなく日本への到達時間を基準に紹介する。

〔解説〕 前回の号で述べたように、1月9日に第73航空団の72機が東京の中島飛行機武蔵製作所を第1目標として出撃したが、悪天候のため、第1目標を爆撃できたのは18機、最終目標または臨機目標を爆撃したのは34機、損失機6機という散々な結果に終わった。この日の昼に最終または臨機目標として東三河及び遠州地域に一般目的弾の投弾があった。飽海または東田、牛川地区に投下したのは、そのうちの1機であった。同地区は、現在の豊橋公園東側に位置し、北側に田圃があり近くを豊川が流れている。

この部分は日誌の著者が爆弾の炸裂した跡を見学に行った時の記録である。全部で六ヶ所、九つの大穴を発見するが、その穴は直径5～6間（約10m）深さ3間（約5m）もある大きなものだった。爆風により「新川沿いの道の片側は大地震のあとのやうな崩れが一町余り」にもわたって崩壊していた。住宅街に落ちなかったのは不幸中の幸いであった。その不幸中の幸いが全くの偶然であったことは、日誌が「もし敵が一秒早く落したら飽海は全滅。二秒早かったら旭町から新町へかけて全滅しただらう」と記していることから明瞭であった。九死に一生を得た子供の話は、住民からの聞き取りであろうか。なお、後述のように日誌第二冊目の冒頭の1月9日空襲の「余聞」によれば、豊橋地域への投弾は大崎、磯辺、豊川、飽海の四ヶ所³であった。

1月11日（木）

(49) 夜半用便に起きて時計を見ると丁度十二時、もうそろそろくるところと心構へしてみたが中々来ない。ついうとうと眠りかけた午前二時サイレンが高らかに鳴り出した。そろそろせたとはいえ起きる。戸外に立つと雲の切れ目から所々星がのぞいてゐる。晩方まで吹きまわつた風はいつしか落ちて静かな夜だ。ラジオの情報は敵機が潮岬めがけてやつて

来たがその手前で方向をかへ志摩半島から名古屋を襲ふ素振りを見せかけて、東北に進み駿河湾から静岡県に侵入し帝都方面さして行つて仕舞つたといふ。従てこのあたり例のウンウンの爆音もきかず二時四十分解除になった。

自分の組十三軒のうち出征軍人が九人そのうち子供を抱へた女世帯が五組ある。この人達今迄は協力一致よくやってきてくれた。実際女手一つで二人三人の幼児を抱へ敵の魔翼下留守を預るのは並大抵の苦勞ではない。処が九日初めてこの地に敵の爆撃を受けてからこの人達の間に大恐慌を来したと見へ、昨日一人は豊川の親許へ引上げた。尤もこれは前々から準備中だったので偏にその機を早めた訳であるが、外にまた浮足だったのがあるやうだ。家持ちは兎に角借家住ひの人達では無理もない処でそれが当然だと思はれる。

一方組としても何一つ役を持つて貰^{もら}つてゐるではなし、何かと世話許りかかる女世帯と来ては余り有難い存在ではない。結局この人達は親許なり身寄りへ引上げて貰うのが双方の利益ではあるまいか。かくいえば出征者の家族に対し不義理のやうにも聞へるが、ここもまた戦場となつた今日もともと永住の覚悟で来た訳でもなし、一致協力の建前からいえば足手まといのため充分なことも望まれず旁々もつて尚この土地に踏み止まらねばならぬ必要はないやうに思ふが、それは私の考へ違ひだらうか。

〔解説〕 作戦概要によれば、1月10日、第73航空団のB-29、3機が気象観測と東京の小倉石油を爆撃するために出撃した。このうち1機（WSM103）は、10日1400K時（日本時間13時00分）、次の1機（WSM104）は、10日1800K時（同17時00分）、最後の1機（WSM105）は2004K時（同19時04分）に出撃し、それぞれ10日2154K時（同20時54分）、11日0144K時（同00時44分）、11日0338K時（同02時38分）に、小倉石油にM18収束焼夷弾20発を投下した。WSM103は、日本

3 既述のように『豊橋市史』等は、被弾場所として東田町、牛川町をあげている。これに対して爆撃日時に最も近い日誌の記述が、大崎、磯辺、豊川、飽海という地名をあげ、日誌の著者自身が飽海については現地へ確認に赴いているところからすると、これまで市史等が記述してきた2町以外にも被弾地域があったと言わざるを得ない。また、これまで爆撃機は1機とされてきたが、被弾場所の位置関係から考えて2機以上が投弾した可能性が強いと思われる。

時間で10日20時台の来襲機と一致する。この日は2機の写真偵察機F-13が出撃したがトラブルによりいずれも早期帰投した。

豊西村（1944-45）は、00時06分に1度目の警戒警報発令「志摩半島ヲ松坂、名古屋、瀬戸、秋葉山上空ヨリ東進」、同48分に警報解除、02時20分に2度目の警戒警報発令、「志摩半島ヲ知多、足助、浜松、静岡、伊豆ヨリ海上脱去」、同45分警報解除、さらに21時47分にも警戒警報が発令され、「御前岬ヨリ掛川、秋葉山上空ヲ信州方面へ侵入セリ」としている。警報は22時39分解除となった。原田良次（1973）もまた、00時40分、B-29、1機、昨夜と同じコースの甲府をへて東京へ、04時40分、B-29、1機、同じコースで東京へ。21時00分、B-29、1機、横浜をへて熊谷、日立へ。そして、東京港爆撃と記している。なお、21時台の来襲について、日誌は、B-29の50回目の来襲として伝えている。

実はこの1月11日に、日誌の著者は、10時頃から夕方までに5回の地震の揺れを感じた⁴。その日の様子を次のように記している。

【地震】 今日午前10時神祇会豊橋部会の祈年祭に参列。水谷神職の祝詞奏上中、ガタガタと家を揺がして地震襲来。一同も固唾をのみ祝詞奏上も一時途切れたが、程なく納まつたので、そのまま式を進め、続いて玉串奉奠となった時、再び揺り返して来た。これは先のよりは弱かつたので何事もなく済んだ。午後一時過ぎ直会なおらいを戴き、帰宅の途中また一揺れして、人々の戸外に飛び出すを見たが、歩いてゐては感じなかった。帰宅して暫くすると時計の止る程度に一揺れ。少し間をおいて又々一揺れ。こうして晩方迄に五回襲来、性質は地震としては緩慢な方で、震動が少し長かったやうに思ふ。何れ先月七日の余震であらうが、折も折とて前途の多難を暗示するやうに思はれてならなかつた。

(50) 近頃は敵機襲来で夜中にいつ起きられるかわからないのでどことも早寝だ。その中でも殊に早寝の自分がフト眼をさますとサイレンが鳴って居る。時計を見ると午後の十時だ。戸外へ出ると晩方から雨模様だった空は真暗で動きがとれず手搜り足搜りといふ始末。

情報をきくと糞いまいましい敵め今夜も駿河湾から静岡県に侵入、富士川に沿つて山梨県に入り右して帝都に行かふか、左して名古屋に向はうかと思案してゐる中に長野県の上田まで行て仕舞つた。そこで慌てて東に向をかへ、群馬県の前橋へ向つたといふ。何れ帝都に出て逃去するだらうが、そんなことであつてなく警報は解除、この間僅かに四十分。異常を認めて置いて再び床につく。

十一月二十三日を皮切りに今夜まで警報の発令されること正に五十回。その内五回の本格的空襲以外は少数機による偵察ながらの来襲で中には敵影を見ずに終つたのも少くない。身を持って味わつた空襲体験記。今五十回に達したのを機に一冊に綴り番号を追ふて何冊でも誌してゆかうと思ふ。(珍彦)

自分はことし六十三、五十六になる婆さんと二人暮らし。子供はあつたが呉れたり死んだりして今は一人もない。去年の昏から市と神祇会から囑託されて市内各神社の御由緒改訂と豊橋神社誌の編纂に携はつてゐる。住居は瓦町神明社の近くでささやかな居宅をもち、この四月から隣組長をつとめて居る。この戦時下の組長は人事の異動から国債や貯金の取扱が税金の取立、さては生活物資の配信まで何でもござれの忙しき。その上空襲ともなれば隣保班長不在のときその代理もせねばならぬ。そんな関係から敵機襲来の有様を記録して置たら何かの参考にならうとこの日誌を初めて見た。

従て自分一己の記録だから主観も客観もぶち交ぜ

4 この地震は13日の三河地震の前震のようである。中央防災会議（2007）『災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 1944年東南海地震・1945年三河地震』によれば、「（前震の）発生数は本震2日前の1月11日が最も多く、12日にいったん落ち着いて13日の本震をむかえることになる」とし、有感地震の回数は5回から6回としている（<http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1944-tounankai> JISHIN/ アクセス日：2014年5月30日）。日誌の記述は十分に正確といえる。

で、心持ちそのままのなぐり書き。勿論生死の関頭に立つ身には推敲なぞしてゐる暇はない。いはく陣中日誌とでもいふべき種類のものだらう。

昭和十九年十一月

豊田珍彦

〔解説〕日誌によれば、B-29の来襲回数が1944年11月23日から1月11日でちょうど50回に達した。既述のように、50回目の来襲機は、WSM103のB-29、1機で、日誌等からも明らかのように、静岡県下から侵入し、甲府附近を経て東京方面に向かったと考えられる。50回を機に、『豊橋地方空襲日誌 第一冊』とし、第二冊目に入るようになった。

なお、最後の一文は、1944年11月にこの日誌を始めるに当って記したものである。著者は、郷土史家として「市内各神社の御由緒改訂と豊橋神社誌の編纂」に携わる一方、同年4月からは隣組長を務め「人事の異動から国債や貯金の取扱が税金の取立、さては生活物資の配信」などを担当し、空襲に際しては「隣保班長不在のときはその代理」となった。こうした仕事や雑務のかたわらこの日誌を記していたことが分る。

豊橋地方 空襲日誌 二 (一九四四年一月十三日～二月十日)

はじめに

比島の戦線は時々刻々にその熾烈さを増してくる。この勝敗こそ、戦局の帰趨を決する鍵となるであらう。敗けられぬこの会戦、何が何でも勝ちぬかねばならぬ。

敵が我が戦力の分散と補給源の破壊をねらって本土空襲も漸く激しくなってきた。それには三つの系路があって、その一つはB二十九を以てするマリアナ基地からする来襲。その二つは支那大陸から飛び出すこれもB二十九の来襲。その三は機動部隊による艦載機の来襲で、その何れもが已に幾度も実現し、ただ距離の関係でマリアナや支那大陸からくるのに直属の戦闘機を伴はないので来る度毎に我が

荒鷲のため過半迫撃の憂目を見て居る。それにも拘らず物量をたのみ後から後からやってくる戦意は敵ながら相当なものだ。

この地方として今日までに丁度五十回の空襲があり、その内本格的なのは漸く五度で他は少数機で、それも多くは夜間こそこそと来てこそこそと帰ってゆく。その本格的来襲に四五日乃至五六日の間のあつたはそれだけの整備期間を必要とするものらしい。勿論この状態は今後も尚続くであらうが、ここで尻古垂れたら戦ひは敗だと最後の最後まで頑張りぬく決意を新たに第二冊目の筆をとる。

昭和廿年一月十二日

豊田珍彦

空襲日誌 第二冊

第二冊の初めに先づ九日爆撃をうけた余聞をとめて置く。

九日の敵機の爆撃はその後聞く所によると大崎、磯辺、飽海、豊川の下ヶ所へ順次投弾していつたのだといふ。それにも不拘悉く重要施設を外れ単なる盲爆に終つたが、それは大崎飛行場第百部隊、豊川海軍工廠をねらつたもので専門家にいへるとその照準は可なり正確で、ただ冬季亜成層圏では西より東へ四五十米の風が吹いて居り、その誤差の修正が出来なかつた迄だといふ。そしてあの大きな機体から一機一発づつ落すなら相当広い範囲に落ちる筈だったのにあの通り殆んど一ヶ所に五発も集中落下して居ることは敵ながら中々侮り難い腕前で、その誤差を生せしめた気流こそ真に神風ともいふべきで、特に神々の守らせ給ふ国土なるが故にの感が深い。

〔解説〕1月12日から日誌は第2冊目に入った。1月9日、米軍はルソン島のリングエン湾に上陸を開始して、マニラをめざして進軍し、「比島の戦線は時々刻々にその熾烈さを増して」いる状況であつた。一方、本土空襲もしだいに激しさを増してきていた。9日の豊橋地域への爆弾投下について、大崎飛行場や豊川海軍工廠を狙つたとすれば、偏西風の影響にもかかわらず、照準はかなり正確だったのではないかと記しているのは興味深い。

豊西村（1944-45）は、03時07分に警戒警報発令、同34分解除「駿河湾ヲ北上、富士山上空ヲ山梨方向へ侵入セリ」の1件のみが記載されている。原田良次（1973）は、11日21時00分、12日00時55分、同日03時40分にそれぞれ横浜、沼津から侵入（122-123頁）としているので、これらがWSM106~108に対応するものといえよう。

う度々上から下から責めつけられては叶はぬ。とはいへ、今は大事な戦中の真最中だ。こんな事位でヘコタれてどうする。お互に^{しっか}凜りしやうではないか。今丁度六時、外はまだ暗く余震は尚時々やってくる中を婆さんは朝餉の支度にかかった。（午前六時記）

(2) 午前八時頃から暫くの間、東天に太陽と左手に少し距れて一個の〔幻〕日が現れ見る人々を驚かした。これは気象学上の一現象として別に不思議なものではないが、昔から天変地異の前徴のやうに云はれて来ただけに心なき人々に無気味の思いをさせたのもあながち時節柄許りでもなかったらしい。

（午前八時記）

104

三河地震の被害は、愛知県全体で死者2,306名、負傷者3,866名、住家の全壊家屋7,221戸、同半壊家屋16,555戸に上った。被害が集中したのは幡豆、碧海、宝飯の3郡であった。死者数はそれぞれ1,170名、851名、237名、前回戸数はそれぞれ3,693戸、2,829戸、333戸に上った。豊橋市は震源から遠かったこともあり、死者1名、負傷者4名、全壊0、半壊39と⁶、比較的軽微な被害で済んだ。

1月13日（土）

今朝から余震が次々にやって来ては人々を驚かす中に、午後一時中部軍情報で敵機襲来が報ぜられた。来襲は全部で三機。それが四国、中国、近畿の上空に夫々うろついた上、午後二時半までには何れも南方洋上に逃避して仕舞った。警戒警報の発令されたのは西、中地区で、東地区に及ばなかったが、次の情報で待機の姿勢にあつたことは勿論だ。今日敵は我が追撃を恐れてか何処へも投弾せずに帰った。その最中にも二三回余震が来て、この方が遙かに人々を驚かした。

侵入機三機 二機は大阪方面を一機は名古屋を偵察脱去

〔解説〕作戦要約によれば、1月13日は爆撃作戦、気象観測爆撃、F-13による写真偵察は行われなかったが、B-29による武装偵察（Armed Reconnaissance）任務が指令された。第73航空団のB-29、7機が明石、大阪、名古屋の航空機工場の写真撮影を主要目的として、13日0624K時から0646K時（日本時間05時24分から05時46分）の間に攻撃した。このうち4機は機械の故障や過剰な燃料消費のため早期帰投した。3機のうち1機は明石（雲で覆われていて問題あり）を、1機は指定されたすべての目標の航空写真とレーダースコープ写真を、残りの1機は明石と大阪のレーダースコープ写真を撮影した。

この日の来襲については豊西村（1944-45）や津の空襲を記録する会（1968）には警戒警

報発令の記載がない。

(3) 今日終日頻々としてやつてくる余震に脅かされた。余震といへば追々微弱になつてくるのが常だのに地鳴りがして突き上げるやうな揺れ方をするのは震源地に近いからだ。新聞も来ず。ラジオでの発表もないから確かなことは勿論判らないが、風評によると蒲郡形原地方が殊に激震で倒壊家屋相次ぎ死傷者少からず。且つ海嘯の襲来もあり。被害激甚。それがため豊橋市から多数の医師が救援にかけつけた。形原では小学校に宿営中の兵士が倒壊により多数死傷したなどと伝へ、東海道線は蒲郡以西で不通。愛電線も同様だといふ。風説だからどこ迄信用してよいか分らぬが、これを総合して震源地が或はその沖合、即ち渥美湾中にあつたのではあるまいか。（午後七時記）

1月14日（日）

(4) 昨日以来余震は中々治まらず数十回にも達し、人々を不安の底に叩きこんだ。夜に入つて寝についてたものの安眠どころでなく着のみ着のままのゴロ寝だ。そして午後六時頃相ついで襲来した二回は意外に強く、丁度朝餉の支度中とて人々を少からず驚かした。

一方敵機はゆふべ一夜幸に襲来を見なかつたもののこれにも心許されず。こうして上からの敵と下からの脅威にさらされながら、おめず憶せず敢闘する銃後国民の姿は誠に頼しい限りだ。（午前七時記）

(5) ひるに近く配達された新聞で今度の地震の真相が判明した。想像した通り震源地は渥美湾内で、被害地区は幡豆郡を中心に西は碧海郡、東は宝飯郡の西端に及び、全半壊家屋は推定約二千戸、死傷者多数に上る見込みで、噂された海嘯は事実なかつた。已に緊急工作隊、医療救護班の派出あり。警防団、婦人会、女子青年団の活動により、一路復興に雄々しい闘魂をたぎらせ、物資配給の手筈も已に整つた由で、もう多少余震はあつても案する程のことはないといふ。さあ、大して被害もなくすんだこの地方。地震などあつさり忘れ、国土防衛と兵器・食糧の増産に突進しよう。（午前十一時記）

6 飯田汲事（1985）590頁。

[解説] 震源が近いと思わせるような余震が頻発しているものの、震災当日は「新聞も来ず。ラジオでの発表もない」状態であったことが分る。周知のように戦時下の大地震の被害については報道管制が敷かれて、十分かつ正確な情報が市民まで届かなかった。そのため風評により徐々に実態を知ることになった。日誌は、翌日14日の昼近くになってようやく新聞が配達され、真相が判明したとして「全半壊家屋は推定約二千戸、死傷者多数に上る見込み」と記しているが、情報源は不明である。このような記述が新聞報道にもとづくものとはちょっと考えられない。というのは、1月14日付の『中部日本新聞』の記事でさえ、被害の状況については「十三日早晩一部電灯線が切断する程度の可成の地震が東海地方を襲ったが、旧臘七日の激震に比べると震度は遥かに小さく愛知県下三河部方面で若干全半壊の家屋があり死傷者を出しただけ」であったと報じるに止まっていたからである⁷。

その後の調査で宝飯郡形原町では233名が死亡するという大きな被害を出していたことが判明している。日誌は、風評と断りながらも、同地域における深刻な被害の状況や緊急工作隊や医療救護班の派出などを伝えていて興味深い。なお、一般には、被害が大きくなった理由の一つとして、内陸直下型であったこと、前年の12月7日の東南海地震による建物へのダメージがあったことなどがあげられている。

(51) 今日また四五日を周期とする敵の大掛かりな空襲をうけたのでそのあらましを書きとめて置く。已に午後一時過ぎ中地区及西地区には警戒警報が発せられ情報により敵機の来襲を知つて、これに備へる処へ二時になつて東地区にも警戒警報が発令されたが、敵愈々近しと見て二三十分遅れて更に空襲警報が発令されたのだ。

初め敵は数挺団となり熊野灘から紀伊半島にあとからあとから侵入して大坂を襲い、転じて鈴鹿山脈

を超へ、次々に名古屋めざしてやって来た。其外志摩半島から名古屋に向つたのもあれば、渥美半島から侵入し名古屋をめざした奴もある。

何れも五六機乃至十機の編隊で、ここで西方に見た二三条の飛行雲は渥美半島から侵入した奴のものらしい。十四時四十分頃大津付近を名古屋に向ふ敵編隊ありとの情報に、西の方を注意して居ると恐ろしい地響きがして地震が却下に迫った。

暫くすると名古屋を荒した敵の一編隊であらう、遙の北方を東南さして遁走するのが見へる。隊列も何もなく丸で入内雀の群のやうだ。味方戦闘機が二機これに喰い下つてゐるのが見えてハラハラさせられる。これが通つて暫くすると次の敵編隊が西北から頭上をさしてやつてくる。鮮かな飛行雲を曳いた十機許りの編隊だ。けたたましく退避の鐘が鳴る。先の爆撃にこりて皆壕にもぐると頭の上で機関銃がバリバリと鳴り出した。我戦闘機がこれに突入したのだらう。爆弾一つ位い落されるもの覚悟してみたが一向にその模様もない。もう通過した頃と出て見ると、もう東南方遙かあなたを遁走してゆく。それに見とれてみるとまた地鳴りがして地震がやって来た。この頃全天到る処に飛行雲が現れ、それも多くは一筋づつで中には真上に居るものもある。敵機がかくまで分散したのかと初めは思つたが、どうもそれは迎へ撃つ味方機のものらしい。三時を少し過ぎたころ、またもや西北から敵が八機編隊で頭上めかけてやつて来た。再び退避の鐘が鳴り誰も彼も壕に飛び込む。丁度真上を通る頃耳を打つ地響きハツと首を縮めるとそれは爆弾でなくてまたもや地震の襲来だつた。

通過するを待ちかねて飛び出して見ると、これも東南さしてゴチャゴチャになって逃げてゆく。情報によるとこの一群を最後としてもう敵機はみないといふが、尚処々に飛行雲を曳いた機影が見へる。さては味方機の雲だったかと初めて諒解された。かくて四時少し前空襲並に警戒警報とも解除されて身も心も軽くなったやうだ。

敵めはけふ名古屋に少し許り投弾したのみで外にどこへも投弾した模様はないといふ。遙々とやつて来て味

7 木俣文昭他 (2005)『三河地震60年目の真実』中日新聞社、140頁他参照。

方機に追ひまわれ投弾もせずに逃げ帰るなんて全く
ざまはない。そのうち二機は名古屋市民環視のなかで
南区に打落されたといふ。何れ追撃戦で相当戦果の上
つたことだらう。どうかさうありがたいものだ。

けふは空襲の真最中に数回の地震襲来があり、頭上
に敵機を迎へ脚許が揺れる。そんなことが二三次も
あり、生死の関頭に立つた身にも余りよい気持ちで
はなかった。殊に最後のときなど地鳴りを爆音かと思
ふ位ひで実にいやな思をした。この気持ちは身を以
て体験したものでなければ到底理解されない処だ
らう。でも戦ふ国民だ。また地震かと女子供まで
が笑つて居る位まで度胸が据つてゐるのが頼母しい。

来襲数六十機 撃墜九 撃破三十四

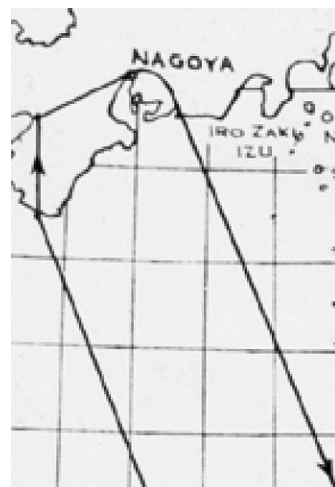
〔解説〕三河大地震の翌日14日には、第73爆撃
航空団による三菱重工名古屋航空機製作所に対
する大規模な空襲があった。作戦任務報告書
No.19によれば、14日0730K時（日本時間06
時30分）から500ポンドGP10発をそれぞれ
搭載したB-29、73機がサイパンのアイズリー
空港を離陸した。

日本への侵入コースは、野戦命令書では紀伊
半島の御坊崎附近を北上し、加太湾附近をIP
として名古屋へ向かうことになっていた。実際
には、73機のうち9機が機械故障のため早期
帰投、1機が目標へ向かう途中で不時着し、残
り63機が侵入に成功したものの、一部には指

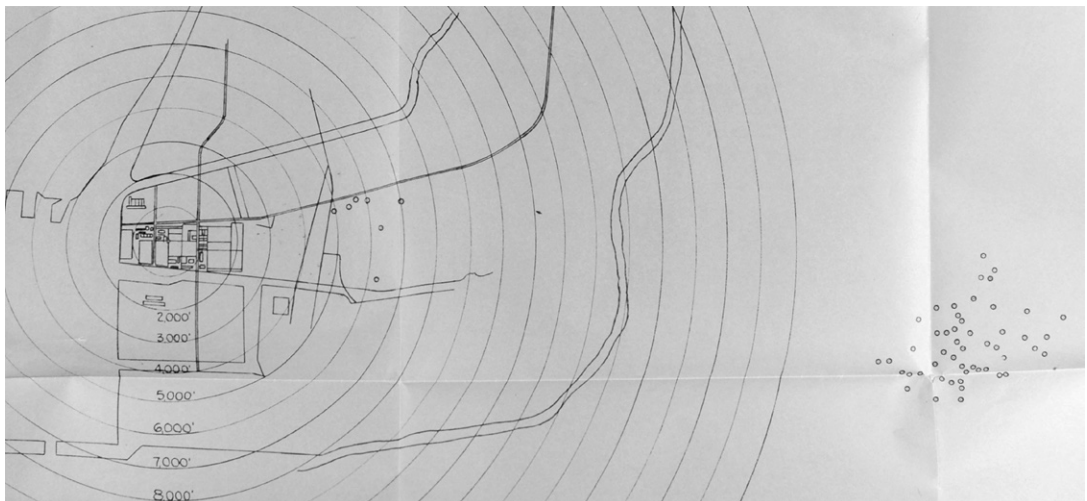
定されたコースを大きく外れ、刈谷附近などを
IPとしたり、IPを利用しなかったりしたグルー
プもあった。第19図は、報告書に掲載されて
いる当日の平均的な飛行コースである。

こうして、日本時間14日14時40分から同
日15時16分にかけて40機が第1目標に投弾、
21機が最終目標（新宮、見付、浜松、田辺、
松坂、尾鷲、大王崎飛行場、名古屋）に、2機
が臨機的目標（硫黄島）に投弾した。

第20図は、米軍が作成した大江の三菱重工
名古屋航空機製作所への爆撃際の着弾図であ
るが、工場への命中は確認されなかった。た
だ、目標周辺の野原や市街地に約75の爆発が



第19図：1945年1月14日の飛行ルート



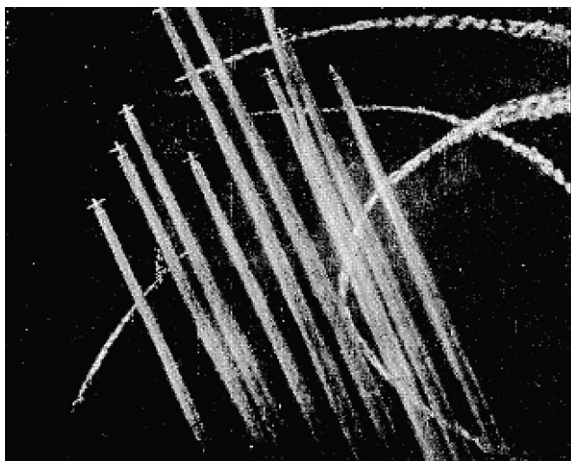
第20図：1945年1月14日の空襲の着弾図（円の中心は三菱重工名古屋航空機製作所大江工場）

観察され、隣接する未確認の工場に一定の損害を与えたとしている。

名古屋空襲を記録する会（1987）は、「1. 三菱航空機工場 半壊一、小破四、疎開后ニシテ被害軽微、2. 大同製鋼星崎工場、工場半壊三、死者八、傷者三、3. 全 宝生工場、工場半壊二、傷者三、4. 三菱工具寄宿舍三棟半壊、死者一六、傷者三〇」などと記している（11頁）。

日誌によれば、14時20分過ぎになって空襲警報が発令された。また、B-29は「熊野灘から紀伊半島にあとからあとから侵入」し「次々に名古屋めさしてやって来た」「志摩半島から名古屋に向つたのもあれば、渥美半島から侵入し名古屋をめざした奴もある」と、侵入の様子を記している。そして、豊橋の空には多数のB-29が北西から東南へ飛行して、日本の戦闘機がこれに突入していくのが見え、機銃掃射の音が聞えた。

米軍資料によれば、23機が損傷を被ったが、11機が日本軍機、4機が対空砲火、6機がその双方、2機がその他によるものであった。損失機は2機、さまざまな理由で不時着を余儀なくされたのは5機、負傷者12人、不明者34人にのぼった。他方、日本軍に与えた損害は、戦闘機16機を破壊、7機を確実に破壊し、25機に損傷というものであった（第21図（写真）は『朝日新聞』1945年1月15日付に掲載された14日の名古屋市上空における空中戦の様子とされ



第21図：名古屋上空の空中戦の様子

るもの）。

豊西村（1944-45）は、13時50分警戒警報、14時23分空襲警報が発令され、「見附、岩水寺爆撃、美園西方ニタンク落シタリ」の記述あり、15時50分に空襲、警戒同時に解除となった。津の空襲を記録する会（1968）は、14時00分警戒、14時15分空襲警報発令、15時07分空襲、16時00分警戒警報解除、この間「伊勢市、神宮、松坂漕代、明野飛行場被爆、常磐町250キロ爆弾8発落ち死1傷16」「余震続くB多く北上、名古屋三菱へ」（16-17頁）と記している。次の翌15日の日誌にあるように、14日の爆撃では伊勢神宮の外宮に爆弾が落とされた。

一月十五日（月）

昨日の敵機襲来により我国として古今未曾有の一大事が持ち上つた。それは誠に恐れ多いことであるが、午後二時五十八分ごろ侵入してきた敵の三機により外宮神域に投弾され、これがため神館と神楽殿とが打ち壊されたが御本殿の御安泰に坐したことは何よりと申さねばならぬ。

かくて我国唯一の聖地が敵獣機の翼下に蹂りんされたことは一億国民の断じて許し難い処であり国辱といつてもこれ以上の国辱がまたとあらうか。もしそれ防空の任に当たるもの万一にも手拔りのあつた結果とすれば罪万死に値すべく、我ら国民何を措いても憤激を新たに敵米英を撃滅し、この国辱をそぞぎ併て神明にこたへならねばならぬ。（午前十時謹て話す）

[解説]『朝日新聞』（昭和21年1月15日付1面）

は「B-29名古屋附近に来襲 豊受大神宮宮域に投弾 斎館、神楽殿崩壊す」の見出しで、外宮爆撃を報じた。記事の詳細によれば、「午後二時五十三分頃三機編隊は聖地上空に現はれ、外宮神域に一斉に投弾した。爆弾は神域内の広場や宮域林に落下し斎館二棟、神楽殿五棟が崩壊した」。津の空襲を記録する会（1968）は外宮の被爆を2月15日夜としている（17頁）。また、『三重県史 資料編：近代政治・行政Ⅱ』

(1988) が、1月14日の空襲の時間帯を午前1時45分、50分(明野飛行場)、同2時11分(宇治山田)、同30分(松坂)などとしている(941頁)のは誤りであろう。

1月15日(月)

(52) あれ以来頻々としてやって来た余震も余程落付いたと見え午後から目立つて少くなり已に二夜を掛小屋で寝た人達も今夜からは我が家で寝られることだらう。そんなことを話しながら早めに寝た。ふとめを醒ますとサイレンが鳴つて居る。時計を見ると十一時だ。地震の代りに敵めがやつて来たのだ。いまいまいこと限りなし。敵は一機で志摩半島から名古屋をめざしてやつて来た。何れ東に転じこの附近を通るに違ひないと専ら西の方を警戒しているとパッと流る数条の照空灯のあなた、例のウンウンウンが聞へて来た。そこここで退避信号が鳴る。全神経を耳に集中して大空を仰ぐと少し北に寄つてゐるらしい。忽ち北方から何とも分らぬ大きな音が響いて来た。敵の行掛の駄賃に投弾したのではなからうか。間もなく爆音は闇に消え、情報は浜名湖の北方を東に駿河湾から南方洋上に脱去したことを伝え、十二時に近く警報は解除された。寒いけれども風もない静かな夜だった。

侵入機一機 名古屋方面偵察脱去

「解説」作戦概要によれば、気象観測爆撃任務(WSM113)のB-29, 1機は15日1730K時(日本時間16時30分)にサイパンを出撃、高度30,800フィートからM18収束焼夷弾14発をレーダーで名古屋の第1目標(目標名の記載なし)を爆撃した。すべての爆弾が目標地域に着弾した。この日の様子について名古屋空襲を記録する会(1987)は、B-29, 1機が潮岬→三重→名古屋のルートで侵入し、23時38分頃、守山町山中に焼夷弾を投下し、その後、岡崎→二川へ抜けた(12頁)と記している。コースについては、日誌もまた「志摩半島から名古屋めざしてやって来て」、「浜名湖北方を東に駿河湾から南方洋上へ脱去」としている。豊西村(1944-45)は23時25分警戒警報発令、16日

00時07分同解除となっているが、コメントは「伊豆方面ヨリ浜松、名古屋、潮岬方面へ脱去ス」と逆のコースとなっている。これは転記ミスであろうか。

1月16日(火)

(53) 先程の敵機が去つてやうやう眠りについた午前二時、又しても警報が鳴る。戸外に出て敵やいづこと見張つてみると情報で前と同様志摩半島から侵入し名古屋めざして来るといふ。何れまたここを通るに違ひないと心待ちしてゐると、忽ち一条の照空灯が北に向つて流れだした。もう名古屋を経て近くへやつて来たと見へ微かに例のウンウンが聞へ、退避の鐘が鳴り出した。耳を聳てゐると、今度もずっと北寄りに聞える。退避とは少し慌てすぎだらう。

間もなく爆音は闇に消え去つた。敵め今度は投弾した模様もなく物音一つ聞へない。やがて敵が遠州灘出たころ警報解除。この間僅かに四十分。(ここまで書くと余震また一つ)

今度も敵は一機だ。眠気さましに面白半分やつてゐるらしい。敵の神経戦だなと大騒ぎする程のこともあるまい。一方余震は非常に減少し時に思い出したやうに小さいのがやつてくるに過ない。その入れ代りに敵めがこう頻々とやつて来て癪にさわることも夥しい。空襲と地震。どちらも厄介物たるに於て兄たり難く弟たり難し。それが十四日のやうに一处でないだけよい方だと思はねばなるまいか。

侵入一機 名古屋方面偵察脱去

ゆふべから考へれば考へる程敵のしわざが憎らしくてたまらぬ。怒心頭に発すとは正に今国民の気持ちだらう。神聖比ひなき神宮を侵し奉るなどどう考へても獣の仕業だ。この獣たちも退治て仕舞はねば我々の疳の虫は治りつこない。帝国の尊厳を傷け正に悔を千載に残したのだ。

(54) 郷土防衛について緊急常会を開くことになり会場渡辺君の門口をくぐるとたん午後六時五十分警戒警報が鳴り出した。常会をそのけにして直ちに警備につく。情報によると敵め今度も一機で志摩半島から侵入し大きく琵琶湖方面を迂回して名古屋

屋にくるらしいといふ。まもなく照空灯が夜の大空に流れる。その先に当つて微かに爆音が聞へて来た。もう名古屋を通つてやつて来たのだ。爆音が段々大きく聞へてくると、そこそこで退避の鐘が鳴る。敵は市の上空より可なり北によつて東進してゐる。これに対し退避を打つのは少し行き過ぎの観がないでもない。

敵は例の通り浜名湖をめざしあれから遠州灘に出て基地に帰るつもりだらう。程なく爆音は闇に消え暫くすると警戒警報も解除になった。

侵入一機 名古屋に少量爆弾投下

警戒警報解除と共に直ちに緊急組常会を渡辺君方で開く。全員出席。議題はこの頃のやうに頻々たる空襲で正副隣保班長だけでは警備も大底ではない。尤も組長もこれに協力はするがこの有様では永続不可能だ。そこで今回町の指示により全員にてこれに当ることとしたといふのだ。渡辺君の原案では二人づつを一組とし順次一警報更代として警備に当るべきだとある。私から男女を組合せ且つ地域を勘案して決定したいと述べ一同の同意を得、次の五組を編成した。(但三沢、中村は子持ち故に除く)

豊田=佐々。 杉本=松井。 渡辺=山本。

中村=相原。 加藤=園原。

かくて今夜より実施すること。発令の場合は直ちに警報を伝達し、敵機の動静を看守し、解除の際また組内に伝達することを取り極め約一時間で散会。

(55) 午後十一時少し前余震としては可なり烈しいのがやって来た。眠り端だつたのでびっくりして飛び起きる。尤も晩方五時頃続いて二度も余震があり何となく気味の悪い夜だった。序を以て組を一巡したが何処にも異状のなささうなので帰つて寝につく。処が五分もたたぬ内に今度は警戒警報だ。今夜から初まる防衛当番なのですぐ飛び起きて組内を伝達して廻る。相手の佐々と情報を聞きながら見張をする。敵め今夜は熊野灘から侵入名古屋名古屋を襲ふと見せかけ鈴鹿のほとりて西に転じ琵琶湖を経て京都までいつたがそれより東にかへた。処がど

う間違へたか名古屋へもよらず伊勢湾に出て鳥羽沖を南方洋上に脱去したといふ。従てこの附近上空に敵機の爆音もきかず十二時に近く警報は解除、僅か一時間たらずだがすっかり冷へ切つた体を焚火で暖めながらこれを誌し終わつて寝る。

侵入一機 京都にて少々投弾 脱去

「解説」16日は、それぞれB-29、1機ずつであったが、通算54回目から55回目の3度の来襲があった。日誌によれば、1度目の警戒警報は02時00分から02時40分まで、2度目は18時50分から、そして3度目は23時00分少し前から約1時間である⁸。豊西村(1944-45)は、02時52分から03時46分、08時55分から09時31分、18時40分から19時29分、22時50分23時45分の4回にわたって警戒警報の発令と解除を繰り返したと記録している。名古屋空襲を記録する会(1987)は、16日は02時20分から02時51分と18時53分から19時53分の2回(12頁)、津の空襲を記録する会(1968)は、02時24分から03時04分、18時44分から19時35分、22時16分から23時42分の4回の来襲を記録(16-17頁)している。原田良次(1973)は、10時00分に1度、来襲した(131頁)としている。

作戦概要によれば、①15日2041K(日本時間19時41分)、WSM114のB-29、1機が出撃し、名古屋の第1目標に高度約3万mからM18収束焼夷弾15発を投下した。また、②写真偵察機F-13A(PRM16)は、名古屋及び東京の目標を写真撮影するため16日0300K時(日本時間02時00分)にサイパン島を出撃した。174ノットの向かい風のため、東京の第2目標を撮影した。③WSM115のB-29、1機は、16日1217K時(日本時間11時17分)に出撃、同日2022K時(日本時間19時22分)に高度29600フィートから名古屋地域に250ポンドGP10発を投下した。同機は16日2022K時(日本時間19時

8 『朝日新聞』(1945年1月17日付)は、B-29が15日夜11時30分頃及び16日朝2時30分頃の2回にわたり各1機が名古屋附近に侵入し、若干の焼夷弾を投下して去ったことを伝えている。また翌日の同紙(1945年1月18日付)によれば、16日午後7時頃に名古屋地区に、同11時30分過ぎに京都地区に各1機が侵入して爆弾を投下した。

22分)に高度27500フィートから豊橋に250ポンドGP1発を投下したと報告している。さらに、④WSM116のB-29, 1機は、16日1632K時(日本時間15時32分)に出撃した。第1目標は名古屋の陸軍造兵廠熱田製造所であったが、名古屋は10/10の雲に覆われていたため、17日0019K時(日本時間23時19分)に京都に高度29000フィートから250ポンドGP20発を投下した。

以上から、時間やコースに若干のバラツキや違いはあるものの、日本側の警報発令は、16日には米軍資料の4回の出撃を反映したものとなっているといつてよい。例えば、豊西村(1944-45)の08時55分から09時31分の警戒警報は、F-13Aに対するもので、原田良次(1973)が記しているように、浜松、甲府、八王子を経て東京に侵入したものであろう。

1月17日(水)

(56) 霜凍る午前四時又々三度目の警戒警報が鳴り出した。防衛等当番は送つても初めてでは勝手が分りにくかろうと介添に起きいて当番につく。敵め今度も一機で浜名湖上空から侵入したが名古屋へも向はずそのまま北進をつづけ、とうとう飯田附近まで行つてあわてて百八十度転回、もと来た道を南方洋上に脱去して仕舞つた。かつては五十分警報は解除されたが骨をさすやうな暁の風は敵機よりもそのためすっかり震へ揚つて仕舞つた。

敵は今度は余りに北へ行き過ぎその内に時間はくる慌てて逃げ帰るなど全くざまはない。前回には近畿の上空で旋回したのはよいが方角をとり違へ伊勢湾へ出てとうとう帰つて仕舞つた。これは来る度毎に大半を撃ち落され搭乗員の消耗はかくまで素質の低下を来したものだらう。然また一面では我が防空体制の完備と灯火管制嚴重さを示す一証左であらねばならぬと考える。

侵入一機 静岡長野及関東西南部に行動脱去

〔解説〕作戦概要によれば、WSM117のB-29, 1

機は、16日2135K時(日本時間20時33分)に出撃した。第1目標は名古屋陸軍造兵廠であったが、爆弾の継電器が日本の2時間前にショートしたため爆弾を投下しなかった。目標上空を飛行したのは17日0520K時から同日0540時(日本時間04時20分から同時40分)であった。日誌が記録しているのはこのB-29だけであるが、豊西村(1944-45)はこの他に21時27分から22時12分の警戒警報を記録している。米軍資料によれば、これはWSM118により17日1339K時に出撃し、同日2340K時(日本時間22時40分)に横浜市街地を爆撃したB-29のものと考えられる。原田良次(1973)も「夜となり二一五〇ふたたび情報あり、B-29伊豆半島より厚木—東京—勝浦と侵入す」(133頁)と記している⁹。

ここで地震のことを今一度だけ書きとめて置く。

其後余震は大に少くなり思ひ出したやうに時たまやつてくるに過ない。然し一昨夜のなどはかなりの激震で障子は破れる、器物は転倒する始末で中々油断は出来ない。殊に震源地に近く、こう余震が度々やつてくるので人々の恐怖は非常なもので、そこへ色々な流言がとび弥が上にも人々を脅怖のどん底へ陥れて居る。そのため地盤の弱い下地方面や市内は勿論この附近でさへ今以て真冬の寒さをも厭はず形許りの掛小屋をしつらへ、それに寝起してゐるものが少くない。幸に宅は建築も新らしく多少耐震的にも出来てゐるので、それ程に神経をとんがらす必要もないのは何よりだ。震源地に近い幡豆郡方面は被害予想以上に激甚でその数は時節柄発表されないが、彼の濃尾の大震に匹敵するらしい。聞けは発震から家屋の倒壊まで僅かに七秒間。その間に身を以て免れたものの外多くは入口に近く押ししてゐたといふ。科学が進歩しても地震を予知する方法もなく用意する術もない天災だけに遭難の人々に対しては御気の毒の感にたえぬ。

然し地震こそ古い文化を破壊しその上に新しい文化を建設してゆくための天意でもあるからどう

9 『朝日新聞』(1945年1月18日付)は17日04時過ぎにB-29, 1機が静岡、長野及び関東西南部に侵入と報じている。

か生き残った人々の手で捲土重来、新建設に向つてまい進される様祈つてやまない。

昭二〇、一、一八記

1月18日（木）

晩方になつてやうやう来たけふの新聞によると、成都を基地とするB二十九の九州地方への来襲は六月十六日を第一回としてけふ迄に十回、マリアナ諸島を基地とする来襲は帝都から中部地方へかけ十一月二十四日を手初めに十一回合せて二十一回でその機数は延千二百五十機に及びこの内邀撃戦に於て百七十八機を撃墜し二百四十六機を撃破して居るから合て四百二十四機の多数に上る計算だといふ。

B二十九は一機の生産に六十五万ドルと七万時間の労働力を要するといふから撃墜に撃破の機数が帰還不能と見て約二億ドルと二千百万時間の損害を与へた計算となる

(57) ゆうべから今日にかけ敵の来襲もなく、余震にも見舞はれず、のんびりとした一日を送つた。昏色漸く迫る午後七時またもや警戒のサイレンが鳴り出した。もう誰も彼も又かと落着いたものだ。

情報によると敵一機が浜名湖付近から侵入し名古屋へ向ふらしいといふ。東から北へかけ星のまたたく大空を見詰てみると聞へて来たのが例のウンウンの爆音。敵機近しとあたりで退避の鐘が鳴る。漸く近づく爆音に耳をそばだてるとやや南寄りに聞える。いつも北寄りをゆくのに今日はコースを替たらしい。そのまま西をさして遠ざかつてゆく。次々の情報で敵は桑名から鈴鹿をこえ琵琶湖の南方に出たがまた引返してまた爆音が聞へてきた。もう名古屋を経てここまでやつて来たのだ。八釜敷く退避の鐘が鳴る。避けるも馬鹿、避けぬも馬鹿。その馬鹿になって見張つてみると矢張り南に寄つて聞へ間もなく東南の空に消えてゆく。かくて敵はそのまま南方海上に去り八時になつて警報が解除された。五日の月が南天から静かに下界を照し大寒を明後日に控へ馬鹿に寒い夜だつた。

侵入一機	不詳
------	----

[解説] 日誌は、多少おさまったとはいえ余震が

度々襲い、時には「障子は破れる、器物は転倒する」といった激しい揺れもあり、人々を恐怖におとし入れたと記している。これと並行して「震源地に近い幡豆郡方面は被害予想以上に激甚」で大きな被害が出たこと、余震による家屋倒壊の恐れから「地盤の弱い下地方面や市内は勿論この附近でさへ今以て真冬の寒さをも厭はず形許りの掛小屋」に寝起きするものもあることなどについても言及している。しかし、こうした中でもB-29の爆音が止むことはなく、18日19時頃には警戒警報が鳴り出した。

米軍資料によれば、WSM119のB-29、1機は17日1540K時に出撃したが、エンジンの1つが火を噴いたため早期帰投した。WSM120の1機は、航空機が使用不能のため出撃がキャンセルされた。18日に入つてPRM-18のF-13A、1機が0313K時（日本時間02時13分）に明石、大阪及び神戸を撮影するために離陸した。さらに、WSM121のB-29、1機が18日1241K時（日本時間11時41分）に、具体的な目標名は不明であるが大阪を目標に出撃したが、同日2036K時（日本時間19時36分）に第2目標（名古屋）を爆撃した。名古屋上空は雲量10分の9だったためレーダーにより高度3000フィートから250ポンドGP18発と500ポンドGP1発、60ポンド照明弾1発を投下した。

東海地域の各地の記録にあるのはこのB-29であると考えられる。名古屋空襲を記録する会（1987）によれば、来襲時刻19時21分、名古屋港中央埠頭南方海中及び東方空地が被弾したが被害はなかった（12頁）。豊西村（1944-45）は、18時51分から19時58分に警戒警報を記録、「御前岬ヨリ浜松、名古屋へ侵入、豊橋ヨリ浜名湖南方脱去」と記している。

1月19日（金）

(58) 今日は先きの来襲から丁度五日目。また敵の定期便がくる頃とひるを早めに準備怠りなく待ち構へてみると、定刻を少し遅れて午後一時少し廻つたころ果して敵めが大挙してやつて来た。鳴り出した警戒警報を合図に伝達して組を一巡すると、次の

で空襲警報だ。

今日は敵め数個の編隊に分れその多くは熊野灘から紀伊半島に侵入して来たが、その主力は坂神から姫路、岡山方面に行動し、別に伊勢湾から侵入し、名古屋に向つた一隊もあり、主として西の上空を警戒してみた。

最初西南遙かあなたに一条の飛行雲が現れたが、それは友軍機のものらしく、頭を廻らすと東西を北進する敵の三機がある。浜松の上空辺りで急降下をやり、そのまま東の空に消えていった。大方このとき投弾したらしい。それから後は殆んど乱戦状態で、あちこちに敵味方が入り乱れ、飛行雲の太いの細いので大空は蔽はれて仕舞った。中でも南に廻つた敵一機の飛行雲が素敵に美しい。敵に頭上を侵されたことも兩三度に及び、其都度待避の鐘が鳴る。然し真上を少しづつ外れてゐるので、婆さんだけは壕に入れ、自分はそのまま警戒をつづけてみた。それに今日は目立つて友軍機が多く、全天に配置され、むしろ敵主力がこちらに来なかったのが残念にさへ思はれた。かくて敵の行動時間も終りに近く、二時半頃には大方南方洋上に去り、各地に分散してゐた敵も続いてその後を追ひ、二時五十分空襲警報が、三時になるも警戒警報も解除された。

敵は毎度飛行機の補給庫たる名古屋をめざしてやってくるのに、今日は主として阪神方面の工業地帯をねらひ、そのためこの付近には少数機がうろついただけで、被害といふ程のこともなかったやうだ。

来襲約八十機七梯団 撃墜破二十三機

[解説] 1月19日には、まず氣象観測爆撃機の来襲があった。作戦概要によれば、18日1725K時(日本時間16時25分)に大阪を目標に出撃したWSM122は、19日0142K時(同00時42分)にレーダーにより第1目標に250ポンドGP18発、500ポンドGP1発、60ポンド照明弾1発を投下した。また、WSM123のB-29、1機は大

阪を目標に18日2230K時(同21時30分)に出撃し、レーダーにより19日0442K時(同03時42分)に新宮に爆撃して帰投した。19日1245K時(同11時45分)にはWSM124のB-29、1機は大阪を目標に出撃、19日2045K時(同19時45分)に臨機目標(北緯34度25分-東経135度20分、泉佐野付近)に目視により250ポンドGP20発を投下した。さらに、19日1730K時(同16時30分)に出撃したWSM125(目標大阪)のB-29、1機は10分の10の雲を通して、レーダーにより大阪に250ポンドGP19発、60ポンド照明弾1発を投下した。

この他にPRM18のF-13A、1機が19日0242K時(日本時間01時42分)に出撃し、名古屋の攻撃目標194(三菱重工名古屋航空機製作所)及び大阪、名古屋地域の臨機目標を撮影した¹⁰。

この日には大規模な爆撃作戦が実施された。初めて、東京、名古屋以外の航空機工場である、川崎航空機工業明石工場に対する爆撃作戦が行われた¹¹。同社は1944年には、日本の戦闘機の17%、戦闘機エンジンの12%を生産していた¹²。18日、2045Z時から2135Z時(日本時間19日05時45分から06時35分)にかけて、本隊77機が同工場を第1目標としてサイパン、アイズリー空港を離陸した。また同時間帯に3機の陽動部隊が、浜松を第1目標に出撃した。本隊のB-29はそれぞれ500ポンドGP10発を、陽動部隊は500ポンドGP6発を搭載した。この作戦はH.ハンセルの最後の任務となったが、皮肉にも大成功を納めることになった。

まず、北緯33度地点で陽動部隊の3機が本体から離れて、北緯34度05分-東経136度15分(尾鷲附近)を通過し、遠州灘上の点、北緯34度23分、東経137度15分をIPとして浜松を爆撃した。本隊は潮岬から上陸し、北緯34度30分-東経135度24分(泉大津附近)をIP

10 名古屋地域には浜松も含まれていた。撮影された写真には、攻撃目標194の他、浜松の三方原飛行場及び北三方原飛行場のものも含まれていた。

11 以下の記述については「作戦任務報告書」No.20による。

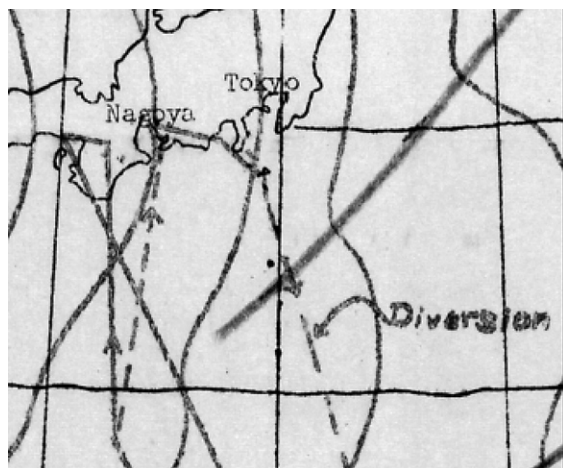
12 E. Bartlett Kerr (1991), *Flames over Tokyo*, (New York, Donald I Inc.), p. 121.

として明石に向った（第22図）。

本隊のうち62機が、明石工場に152.5トンの爆弾を投下し、7機が最終目標及び臨機目標に16.25トン投下した。陽動部隊のうち2機が浜松を爆撃した。全体で6機が機械故障などのため早期帰投した。

これらの爆撃は、いずれも19日0450Z時から同日0524Z時（日本時間13時50分から14時24分）に高度25,100から27,400フィートから目視により行われた。この爆撃高度は、それ以前の爆撃高度より約4,000フィート（約1200m）低いものであった¹³。結果は良好であった。損害評価によれば、エンジン及び組み立て工場に129発の爆弾が命中し、39%が破壊されたか、あるいは損害を受けた。その結果、それまでの生産能力の90%が失われたと推測された。米軍側は、敵機の反撃について、陽動部隊は11回、本隊は148回の攻撃を受けたとしている。

日誌が記している「別に伊勢湾から侵入し、名古屋に向った一隊」とは陽動部隊のことであろうか。豊西村（1944-45）は13時13分警戒警報、13時25分空襲警報各発令、14時40分空襲警報、15時05分警戒警報各解除となっており、「浜松市東部投弾あり、佐藤町、天神町



第22図：1945年1月14日の飛行ルート

トノコトナリ人家火災アリ」と記している¹⁴。その後、日誌は「あちらこちらに敵味方が入り乱れ、飛行雲の太いの細いので大空は蔽はれて仕舞った」と空中戦の様子を伝えている。原田良次（1973）によれば、この日「第10飛行師団は飛行第五十三戦隊を除く各戦隊の全力出動を要請したが、これは米の謀った陽動作戦におびき出された形に終わ」（135頁）り、効果的な対応がとれなかった。これを裏付けるように、日誌は「今日は目立って友軍機が多く、全天に配置され、むしろ敵主力がこちらに来なかったのが残念にさへ思はれた」と記している。

1月20日（土）

十九日来襲以後今まで丸一日敵機の侵入を見なかった処、夜七時土佐港から少数の敵機が侵入し瀬戸内海を経て大坂までやってきた。或はこの辺までやってくるかと待機したが遂にそのことなくして終った。

余震は一日毎に少く且つ弱くなつてもう気に止める程のことないのに地震小屋は今尚所々に作られつつある。恐怖につけこむ流言に脅えての結果だ。衆口金をも溶かすといふ、ハテサテ困つたものだ。

〔解説〕1月20日は日誌にあるように豊橋地方というよりは東海地域へのB-29の侵入はなかったが、大阪周辺に侵入した。この情報は、おそらくラジオ情報にもとづくものだろう。作戦概要によれば、写真偵察機F-13A（PRM19）が20日0300K時（日本時間02時00分）に明石の損害評価の撮影を行うために出撃し、同日1000K時（同09時00分）に爆撃後の様子を撮影した。

WSM126のB-29、1機は19日2223K時（日本時間21時23分）に大阪を目標に出撃した。結果的には、20日0530K時（同04時30分）に四国の南部（北緯32度57分-東経133度00分、四万十川河口附近）に250ポンドGP19発と60

13 Ibid, p.121. 1月19日の作戦では、それまでに比べて最低爆撃高度に大きな変化は見られなかったが、最高爆撃高度が平均して31,000フィート前後から約4000フィートほど低くなった。

14 浜松空襲・戦災を記録する会（1973）によれば、B-29数機が浜松市東部の神立、上西、細嶋、曳馬方面に投弾した（290頁）。

ポンド照明弾1発を投下した。20日1250K時（同11時50分）にはWSM127のB-29, 1機が大阪を目標に離陸した。同機は2033K時（同19時33分）にレーダーにより, 第1目標に250ポンドGP19発, 500ポンドM46焼夷弾1発を投下した。

実は, H.ハンセルに代わって第21爆撃機集団の司令官に着任したC.ルメイが, この日から指揮を執るようになったが, 作戦に大きな変化はなかった。

なお, 大地震のあと約1週間経過し余震も少なく弱くなったにもかかわらず, 災害の大きかった地域を中心に流言が飛び交ったようである。それは余震の多さや激しさ, それらに伴う地鳴りや発光現象などが, さらなる大地震や噴火への人々の不安を掻き立てたことによるものだった。どの地域の話かわからないが, 1週間たっても掘立小屋（地震小屋）が作られつつあることを伝えている¹⁵。

（つづく）

受稿：2014年6月10日

受理：2014年7月17日

15 流言や地震小屋については『中日本新聞』の1945年1月19日付「地鳴り, 発光はつきもの 津波の憂いもなし」, 同じく1月20日付「絶対に大地震なし」, 1月21日付「掘立小屋急造も恐るべき流言から」などの記事参照（引用は, 「三河地震消されかけた直下型地震」[http:// www.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku /mikawa/mikawa/ mikawasinbun.html](http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku/mikawa/mikawa/mikawasinbun.html) アクセス日：2014年5月30日）。

